



Title	中国語文法論への試み：再び大河内康憲先生に教えを乞う
Author(s)	朱，廣興
Citation	中国研究集刊. 1991, 10, p. 56-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語文法論への試み —再び大河内康憲先生に教えを乞う

朱廣興

一、中国語には不必要的品詞論

かりに中国語に統辞論といわれるものが存在しているとしても、現行の中国語研究では、それは理解した「意味」によつて説明されるものであり、すなわち結果論としての説明であり、品詞とは無関係であることを拙稿「〔合品詞による中文構造分析〕批判——大河内康憲先生に教えを乞う」（本誌の日号「一九九〇年」）において論述した。すなわち、現行中国語文法研究において、語順の関係を説明するためには分類される品詞は、実は語順の関係を明らかにするにはまったく役に立たない存在になっているということである。

西洋語の文法体系「品詞論→統辞論」をすべての言語の原理と考へ、それに合わせて行われた現行の中国語研究では、「品詞」と「統辞論」とはまったく関係のない独立しているものとなつてゐる。

〈品詞論〉というものは、文構成というものを前提として行われるべきものであつて、品詞論そのものが独立しているものではない〉という品詞の役割から考へると、品詞分類は分類のための分類でなく、従来の文法研究では、品詞論が文構成（統辞論記述）以前に必要なものであるからこそ、文法的な意味を持ち、文法体系の一環として認められているわけである。

しかし前記拙稿がすでに述べたように、たとえ中国語に「SVO」という文構造が存在しているとしても、それは理解した意味によつて考えられたいわば結果論的な説明にすぎず、品詞とはまったく無関係なものである。

従来の中国語研究では、無品詞は「非常識な結論である」（香坂順一『中国語学の基礎知識』二六八ページ・光生館・昭和六三年）とまで批判されているが、中国語の品詞はそのような役割を持つていないのが事実である。語順の関係を説明することのできない品詞論が中国語の文法範疇に属しているものと認めるわけにはいかない。

ところで、「言語の目的は意思の疎通である。お互の「意味の理解」ということである。文法とはその目的を達成するための方法である。すなわち正しく自分の意思を伝え、正しく相手の意思を理解する方法である。したがって、文法は、目的を達成する前の段階にあるべきものであり、目的を達成してから考えるものではない。

従来の文法研究において「統辞論」の段階でも「文法範疇」と「概念範疇」とは厳しく区別されるわけである。

この観点に立つて考えると、ヨーロッパ言語では、統辞論が品詞論を前の段階のものにして、「語順」の関係を明らかにすることによって意味の理解につながっていくから、「品詞論→統辞論」という図式は文法的な意味を持つものになる。これに對して、中国語の場合、名前は同じであるが、品詞論は統辞論に必要なものではなく、また、統辞論とは、「語順」の関係を説明するためのものではなく、理解した意味（言語の目的を達成してから）に対する「便宜的な説明」になつていている。

もとと「他 吃 飯」・「他 吹 笛子」のような文を「N V N」→「S V O」と説明することによつて、教育上、ある程度の便宜さが得られるということから、現行の研究結果を学校文法と見てもよいのではなかろうかとの考え方がある。しかし、これは大きな誤解である。

前記拙稿がすでに述べたように、現行の文法研究では、「S V O」構造と言われるものを例にして見ても、形の上から「S

V O」構造とされるもの及び非「S V O」構造とされるものとを区別することができます。つまり中国語文においては「意味」を理解しないかぎり、語順によつて言語の「構造」を説明することができないということである。この事実を絶対忘れてはならない。

たとえば、「N V N」言語形式の「構造」を分析して仮に① S V O②存現文③慣用句の三つの種類に分けられるとした場合、確かに「N V N → S V O」という規則が「N V N」という語順の言語表現を三分の一程度は説明することができるようになります。この規則が教科書に取り入れられている現状を見ると、そう思われていると言つてもよがろう。

文法の規範性から考へると、たとえ言語現象をわずかに何バランストしか解決することができない規則でも、それよりもっと適用性の広い規則が出るまで文法として認めざるを得ない。三分の一の言語現象を解決することができるならば、当然「文法」少なくとも「学校文法」として認めたいわけである。

しかし、これはあくまでも適用する対象を確認することができてからの計算である。法則を適用する対象を確認することができなかつたら、法則としての規範性がなくなる。

現行の中国語研究では、「構造」の違いがあるとされているものの、形式上からそれを確認することができない。だから、説明できるものが三分の一あると言つてもどの三分の一であるかを把握することができない。したがつて「N V N → S V O」

といふものを規則と考へると、結局適用する対象を確認することができないから、どの表現についても三分の一の正解率しかないということになる。

逆に言うとどの表現についても三分の二の誤解率が存在しているわけである。これではこの規則が文法としての規範性がないという結果になる。だから当然この類の規則を中国語の文法として認めるわけにはいかない。

いわば中国語研究において使われている「品詞」や「構造」とは実はその理解した「意味」を説明するための便宜的な方法・説明技術と同義語として使われてることを認識しなくてはならない。

このような技巧の研究は、「経伝訳詞」（古文を解説するためのものだから文法として認められない）の現代版である。 翻訳技巧論として論議していいかもしれないが、あくまでも中国語を理解する能力を持つてからのことであるから、中国語を理解するための方法ではない。したがつて学校文法としても中国語の文法範疇のものとしても認めるわけにはいかない。

人の釣った魚を食べることによつて釣り方がわかるはずがない。学校教育に必要なのは、文章を理解してからの説明技巧でなく、ただしく文章を理解するための方法ではなかろうか。

二、説明の技巧よりも理解の方法を

説明技巧よりも中国語の文法研究者として考えなくてはならないのはどのようにして「他 吃 飯」を「かれは御飯を食べる」、「他 吃 館子」を「かれはレストランで食べる（外食する）」と区別して理解することができるかという方法である。これこそ中国語の文法研究対象にすべきものであると考える。しかし説明の技巧が中国語の文法（構造）であると間違えられてきたから、文章を理解するための方法に対する説明はかえつて無視されているというのが現状であろう。

それでは、現行の文法研究で、説明されるはずのない文はいつたいどのように理解されているのか？ それともどのように理解したらよいのか？ まず実例を見ることにしよう。

望月八十吉は「某国人民解放了」が自然受動文として「某国の人民が解放された」と解されることに対し、疑問を持ち、ついに辞書に載っている説明文を証拠にして「解放」を自動詞でもあると判断し、「某国の人民が自由の身になった」と理解すべきと主張した。（『日本語と中国語の対照研究』第8号・一〇ページ・日本語と中国語対照研究会編・昭和五七年）

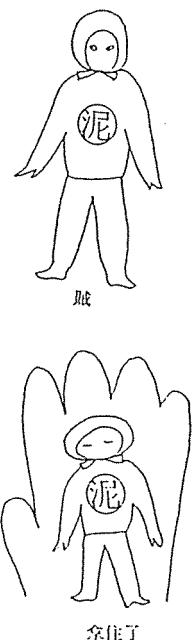
望月が理解した結果の善し悪しは別として、この証拠付け方は、中国語において「動詞の自・他の区別」（もしそれがあるとすれば）が辞書に載っている説明によつて勝手に判断することができるという結論につながりかねない。これは文法研究には取るに足らない方法であるといわざるを得ない。私として

は、現行の中国語研究において自然受動文とされるものが数多くあるのに、望月がなぜこの文にだけ疑問を持つていてるのか、辭書の説明を云々するよりも、むしろ疑問を持たせるきっかけが何であるかを説明して欲しい。

香坂順一は、「工作做完了」「房子焼了」を被害感がないといふことで受け身でないと（『中国語学基本知識』二八六ページ・光生館・昭和六三年）説明した。しかし香坂も認めるように、むかしたとえ受け身表現に必ず被害感があつたとしても、現在の中国語には「〈被〉」の被害感を捨て单なる受身をあらわす中性的な語として用いるようになった（同上二八七ページ）。したがつて現在は、被害感の有無で「工作被做完了」と「房子被焼了」との意味上の違いを説明することは不可能であると言つていい。また被害感の有無はあくまでも個人的な感覚にすぎない。この感覚を理論化することができないかぎり、文法上、何の意義もない。

また、「賊拿住了」という文に対しても、香坂は絵で次のように説明している。

「中国語は概念語であり、ただ概念を一定の順序にしたがつてならべることによって、まとまった思想をあらわす。概念と概念とを必然的にむすぶもの（西欧語のような屈折作用、日本語のような助詞）はない。したがつて、どうむすぶかは比較的自由である。概念語をならべるというのは、たとえてみれば、紙芝居のようなもので、なん枚か連続してはいるが、その前後



の間には空白がある。紙芝居ではこの空白を説明でうめているわけであるが、中国語にはもちろん、この説明がはいりこむ余地がない」（『中国語学の基礎知識』・二八一ページ）。

この考え方を生かすような形で「賊拿住了」という文を次のように説明する。「まず（賊）を描いた一枚の絵が示される。つづいて”とらえた状態”（拿住了）のもう一枚の絵があらわれる。賊→とらえた・とらえられた状態→賊はとらえられたのだという了解がここに成立する」（同上二八二ページ）。

しかし「構造」というものにせよ、図画にせよ、いずれも理解した結果を説明するための技巧であることに変わりはない。中国語の概念と概念との間にどのようにその空白をうめるかということについて具体的に説明しないまま、「賊拿住了」を「賊はとらえられたのだ」と理解すべきという結論を出すのは、理論的には飛躍し過ぎである。なぜならば、現行の文法研究では、「賊」は名詞、「拿住」は他動詞とされてるので「賊拿住了」も当然「S V (O)」構造であると考えなくてはならないからである。ところが、そうでないと示す根拠がいつたいなんであるかという肝心な部分について全然言及されていない。こ

れと関連して香坂はまた次のような説明をしている。

「中国語では一枚の絵をみただけではつぎはわからない。次の絵を見て、あわせて総合的にとらえるよりしかたがないのである。いかに一枚一枚分析的にみても全体の把握はできない。全体の把握はすべての絵の展開の後にはじめて可能になる。」（『中国語学の基礎知識』二八四ページ・光生館・昭和六三年）

この説明は、中国語にも品詞があると強く唱えている香坂にしては非常に不調和な感じがするものである。なぜならば語と語との関係を説明する品詞の役割を否定する結果につながるからである。

もし中国語を理解するため、どうしても「総合判断」が必要であれば、総合判断とはいつたいなんであろうか？ なにを基準にして判断を下すのであろうかということについてもつと論議すべきなのに、本人しかわからないような抽象的な説明にとどまっている。

「自然受動文」に対して、理解の方法として大河内康憲は「論理関係」（『日本語と日本語教育』—文法編—・四八ページ・文化庁・昭和六〇年）という曖昧な言葉を使用していた。 「論理関係」によって「判断」をするということから、大河内の説明と香坂の説明との間につながりがあるのだろう。しかし、どのようにして「論理関係」を見分けるかということについて理論的にまとめられた説明は見られない。

どうやら皆それぞれ独自の「理解方法」を開発しているよう

だが、説明技巧よりも肝心なこの部分を取り上げて研究するには至っていないのが現状である。結果としてどれもまだ理論化・実用化されていないから、使い物にならない。しかし「辞書の説明・被感覚の有無・総合的判断・論理関係」などによる判断がどうしても必要であるなら、中国語の文法研究においてそれをどのように位置付けるべきか考えなくてはならないであろう。ただし「品詞論→統辞論」という体系に固執することを前提にしている現在の研究姿勢では到底無理であると思う。中国語を研究する際、言語研究の基本姿勢はどうであるべきかということをもう一度考え方ではなくてはなるまい。それはどのような方向であるべきかを次章において論じたい。

三、言語研究はその言語に即して考えるべき

今まで述べてきたように、現在の中国語研究では、統辞論とは品詞によつて説明されるものでなく、ただ理解した意味を説明するための技術になつてゐる。この事実がなぜ無視されているのか？ それともなぜ氣付かれないと今まで現在に至つたといふべきか？ いわばなぜ異常といふほど「品詞論→統辞論」という西洋語の原理にこだわるかということを考えねばならない。そのわけは「各国の葛郎瑪大抵同じ同じ、ただ音韻と字形と同じからざるもの」といふ馬建忠の文法観によつて十分に説明できると思う。

なるほど、「各国の文法が大抵同じ」だから「品詞論→統辞論」という西洋語の原理が当然「中国語に通用する」という結論に結びつく。簡単に言うと、西洋語の原理以外、文法として考えられるものがないということである。理論としてこの文法の通じない言語は当然「無文法」という結果になる。そのように、「無品詞論は非常識」といわれるほど現在の中国語研究の方向を支配している力強いものになっている。

たとえば、中国語の文法研究について呂淑湘が次のようすに説明している。

「……歐州語言的詞通常分成八類或九類。漢語裏的詞沒有他們那麼容易分辨，因為他們的詞往往可以從形式上分辨，可是漢語的詞在形式上無從分辨。但是要討論文法就非把詞分類不可。」（『中國文法要略』十六ページ・文史哲出版社・一九四一年）

「文法研究は品詞の分類から」というのがもう定説になつていると言つても過言ではない。

しかし、ドミニコ・ラガナは現代の言語研究姿勢に対して次のように指摘している。

「……“文法”というものはあくまで“ラテン語文法”と同一視された。……ラテン語の文法範疇は、そのまま他の言語の文法構造の記述にも適用された。……」

そのような記述では、特定の言語に存在しない区別や形式も、ラテン語にあるというだけの理由で固執され、逆に、ラテン語にない区別や形式は、「正しくない」ものとして無視されてしまつたのである。……

まつたのである。……

近代になつてからは、ヨーロッパだけではなく、世界各国の多くの言語の文法が作られるようになつたが、ラテン語の形式が模倣され、その範疇が無理に適用されたため、其の言語の文法の文法的事実を曲げて記述することが多かつた。」（『これは日本語か』四〇ページ・河出書房新社・昭和六三年）

まさにその通りである。中国語もまた例外ではない。現在の言語研究では、西洋語の原理以外、別の言語原理が存在し得ないと思われているから「西洋語の原理」と「文法」とが同一視されているのが現状である。

ところで、一九五三年から一九五五年にかけて中国語における品詞の有無論争があつたと言われている。その結果について望月八十吉は「現在のところ、中国ではこのよだな考え方（すなわち有品詞論）が優勢を占めている。」（『中国語学新辞典』五六ページ・「詞類」の項・中国語学研究会編・光生館・一九八七年）と書いている。

いままで私は中国語には品詞論が必要でないことを繰り返して述べてきたので、このような論争に加わる必要はないのであるが、本稿としてはなぜ無品詞論者が「劣勢」になつたかを究明する責任が当然あると思う。

そこで「無品詞論者」とされている高名凱の論説及びそれに対する朱徳熙の批判を取り上げて二点に分けて論争の真相及び論争によって示された研究姿勢を明らかにしておきたい。

a、論争の焦点

高名凱が「中國的語詞以單獨不成句的語詞來說、是無詞品之分的」（『漢語語法論』五〇ページ・台灣開明書局・一九八五年）と主張することと無品詞論者であると決め付けられた。

しかし、高が「無品詞論者」であると批判されながら、そのような批判と矛盾するかのように、中國語を「動詞・名詞・約詞」に分けるべき（同上五二ページ）と主張しているのである。すなわち高を無品詞論者と決め付けるのは大きな誤解である。

高が自分が否定している「品詞」によって中國語を説明しようとするは必ずあるのであろうか。確かに高が中國語の場合、單語の段階では品詞の区別がないと言つた。しかし、「上面說他

可以當各種詞品用、事實上已經承認有詞品的分別、不過是以一個孤独的語詞來說、即因其可以當做各種詞品用、我們沒有法子說他是那一種詞。然而當他用在一個句子裏頭的時候、地位固定了、他的意義確立了、他的功能也就明白了。所以中國的語詞、以單獨不成句子的語詞來說、是無詞品之分的、可是若以語詞在

句子中的功能來說、則是大有分別的」（同上五〇ページ）

「中國語詞並沒有形態學的分別、但是在造句法中、我們可以看出動詞和名詞的區別」（同上五〇ページ）などの説明から、

高が中國語の品詞を否定するつもりはないことがはつきりとかがわれる。

高の「中國語の場合、單語の段階では品詞の区別がない」という主張は、「中國的一切語詞都可以當做各種詞品用。」（同上五〇ページ）という意味であり、けつして品詞がないといふものではない。

高はまた「…並不是說詞品的分類是不可能的、不過是說一般分類的不正当而已」（同上四九ページ）と説明している。これは明らかに「單語の段階で品詞が決められる」という從来の中國語の品詞の決め方に反対しているものであつて、別に品詞論すなわち「文法研究は品詞から」という從來の文法觀を否定するものではない。

したがつて高が中國語を「動詞・名詞・約詞（形容詞・副詞）」（同上五三ページ）に分けて中國語を説明しようとすることは彼自身の論理において別に矛盾していないことが明白である。

「中國語詞並沒有形態的區別、當做名詞用的是“人”字、當做動詞用的也是一個“人”字、當做形容詞用的也是這個“人”字」（『漢語語法論』四四ページ）

「中國語既然缺乏形態學、那麼學西洋的辦法而把中國語的語法按照形態學的格式來研究、當然是不妥當的」（同上七八ページ）などの説明からもわかるように、高は、中國語には形態の変化がないから單語段階では品詞の区別ができるないと主張しているのである。

高にしてはあくまでも「品詞論→統辭論」という原理を認めた枠内での論争であり、中國語に形態變化がないという特徴を

品詞を決める時にどうみるべきかという品詞の決め方をめぐる

ものに過ぎないのであって、別に中国語の「品詞論」と「無品詞論」というまったく違う枠の対抗ではない。黎錦熙の「依句辨品、離句無品」説も高の説と同じであり、品詞論に反対するものではなく、従来の品詞の決め方に反対するものである。

論争の焦点は、明らかに「形態論のない中国語についてどのようにして（単語の段階か文の段階）品詞分類を行うべきか」という品詞分類の「方法論」をめぐるものである。品詞の「有無」は論外であるとしか言いようがない。

品詞が問題にされていないこの論争の結果について望月が「すなわち品詞論が優勢を占めている」と説明しているのは焦点を間違えたものである。

b、西洋語の原理に対するこだわり

「無品詞論者」とされた高の説に対して朱徳熙が次のように批判している。

〔這裏説的（高が言っている）名詞・動詞・形容詞等々顯然不是漢語里的東西、因高先生根本否認漢語的實詞可以分類。那麼剩下來只有兩種可能：第一、指的是另一種語言裏的詞類，這就無異於把漢語語法建築在別種語言的語法系統的基礎上、這恐怕高先生也不会同意的。第二、指的是從各種不同的語言裏抽象出來的一般的詞類觀念。……〕（『現代漢語語法研究』二二一

ページ・商務印書館・一九八〇年）

前述したように、高は枠内の修正を主張しているだけで、「文法研究は品詞から」すなわち「品詞論→統辯論」という従来の文法観を否定していない。つまり、高も朱と同じく、西洋語の原理である「品詞論」から中國語の文法を構築しようとしている。べつに高が品詞論以外の言語理論を考えているわけではないのである。

だから、まるで高が自分と違う文法観を持っているというような朱徳熙の批判も目的を間違えたものであると言わねばならない。しかし、中國語の文法を他国語の原理の上に立ててはならないという朱の指摘からすると、これは、朱の自分に対する自己批判にもなる。なぜかと、朱がこだわっている「品詞論→統辯論」という文法体系こそ馬建忠から伝わってきた正真正銘の舶来品であるからである。

一方、高が「中國語には形態論がない」という理由で「中國語の品詞は文になつてから決めるべき」と枠内の修正を図ろうとしたが、「中國語の品詞は文になつてから決めるべきである」とすれば、「品詞論が統辯論の前の段階のものである」という従来の品詞論と統辯論との関係から考えると、この場合の品詞が本稿で述べてきたように、文法範疇に属するものでなく、説明技術のようなものに変わった。だから当然中國語に品詞がないという結論につながっていく。つまり中國語の特徴に合わず「枠内改革」がその「枠」から離脱して、まったく違う方向へ

飛んでいったという思われぬ結果になつたのである。

結局、高の論説が品詞を否定しながら品詞で中國語を説明しようとしているような矛盾しているものになつてしまつた。ただしこの矛盾は高がどれほど從來の「品詞論→統辯論」にこだわっているかを示すものであり、けつして中國語の品詞論説が正しいことを証明するものではない。

朱は、他言語の原理の上に中國語の文法を構築してはならないといふ、高に対する批判が結局自己批判になつていてることに気が付いていないのは、高と同じ西洋語の原理を唯一の真理と思つてゐるからではなかろうか。

「品詞論」を守らなくてはならないという高の文法観にしろ、「品詞論」以外のものは中國語の原理と認めないと朱の批判にしろ、中國語研究において「品詞論」という西洋語の原理にこだわる研究姿勢がどれほど強いものであるかうかがわれるであろう。

西洋語の原理を唯一の言語原理としか認めないこと、すなわち「品詞論→統辯論」に対するこだわりがいまだに中國語文法を作ることができない現状をもたらした最大の原因であると言えよう。

しかし、結果はともかくとして、抵抗なく、すんなりと西洋語の原理を中國語に適用しようとする朱に対しても、なんとか中國語の特徴を取り入れようとする高の研究態度にはやはり評価すべきものがあるのでなかろうか。

「品詞論→統辯論」を守ることを文法研究であると思うから、結果はどうなるとも「当然」の次の問題になる。そこで本来「性質の違い」を意味する品詞分類は、中國語研究では、「中國的詞完全沒有詞類的標誌、正好讓鏑們純然從概念的範疇分類」という王力の説明からもわかるように、「概念の違い」を「性質の違い」と同一視することによって「中國語にない性質を押し付けられてしまったことになる。そしてまたこの「性質」によつて中國語の「構造」を説明しようとしている。

文法は言語の通則である。特定の言語の通則（原理）だけが文法であるとは言えない。どの言語の通則でもその言語の文法である。

「品詞論→統辯論」という原理は、西洋語を対象にして、觀察され、研究されてからの結論であり、研究を始める前にすでに存在しているものではない、という事実を忘れてはならない。言語研究はその言語に即して考えることこそ正しい基本態度ではなかろうか。時枝誠記は日本語の文法研究について次のように説明している。

「……言語の原則は一般的な原理で律することができないものを持っている。日本語の文法は、日本語そのものに即して觀察されないかぎり、正しい結論を得ることは困難である。ヨーロッパの言語の法則が一般文法の原理であるかのような錯覚を打破することが何よりも大切である。」（『日本文法』口語編・はしがきIV・岩波書店・一九八三年）

まさにその通りである。しかしこれは日本語だけでなく、中國語についても、いや、すべての言語について言えることではなかろうか。どの言語研究でもその言語に即して観察し、研究しないかぎり、正しい結論は得られないと思う。

言語研究の態度について王力が次のように説明している。

「語法是一種法則。法則是從自然和歴史中尋出來、要以合乎自然和歴史為依歸。咱們不能從「一般」的概念出發；咱們必須收集豐富的資料，把握事實的總和。……」

「他並沒有叫我們先定下一些語法規律、然後把一些言語現象安排進去。我們必須重視「綜合」這一個步驟；若不先「綜合」、只知道一味「分析」那就会變成羅列現象、沒有什麼意義了」（『中國語法理論』序二八ページ・中華書局・一九五五年）と、「一般論」による言語研究及び結論が先行する研究姿勢を批判している。

中国語文法研究の先駆者としての馬建忠はいまでも高く評価されているが、その著書である『馬氏文通』に対しても酷評が多い。

高名凱は次のように指摘している。

「各言語有各言語的語法形式、所以用某一種語言的語法套在另一個語言的語法是怎麼也弄不好的。馬建忠之拉丁語法來描写中國語的語法確是不科学的方法。」（『漢語語法論』七一页）

他の言語の文法を中国語に適用しようとする馬建忠の研究態

度を批判している。

「西洋語の原理がすべての言語に通じる」という仮説を立ててもよいが、それを立証しないかぎり、それはあくまでも仮説であり、理論として認めるわけにはいかない。

「西洋語の法則がすべての言語の原理である」ということが事実であるとすれば、それは各言語に即して観察し、研究することによって得た結論であるべきで、言語研究の前提条件にしてはならない。仮説を理論と間違え、他国語の言語事実をすべて西洋語の原理にあてはめることは、別の言語原理が存在すること可能性を最初から抹殺することになる。現に中国語の現在の研究結果がこれを裏づけているのではなかろうか。

「馬建忠是用拉丁語的語法來写中国語的語法、而後來的語法學家則是用英語的語法來写中国語的語法、實則中国語的語法應當用中国語法的本身作研究總對。」（『漢語語法論』七〇ページ）と言われるよう、馬建忠以来、西洋語の原理を中国語に適用することができるという文法觀は中国語研究の根本的な誤りであると言つてもよい。

「格の屈折や形態の変化がない」という中国語の大きな特徴は、従来の研究でまったく無視されている。「論理關係」や「総合判断」などによつて「中国語文の意味」を理解しなくてはならないということが中国語の特徴とは無関係であるとは思えない。

残念なことにこのような理解するための方法は従来の研究で

は、文法範疇のものでないと思われるせいか、個人的秘法にとどまり、理論的なものとして発展していかなかつた。
そこで次は中国語の言語事実に基づいて、すなわち中国語を対象として中国語の文法論を試みてみたいと考える。

四、中国語語法論への試み

品詞は語 (word) の性質に対する分類である。つまり「語」(word) は本来品詞を意味するものである。中国語の語順 (word order) の「語」は、今まで「語」すなわち「word」として思われてきたから中国語の「語」を品詞分類しようとした。しかし、結果として中国語の「語」に「性質」を押し付けようとすることとなつただけであつて「順序」を説明することがまったくできなかつた。概念の違いしかない中国語に品詞論が通用しないとすれば、当然「語順」の「語」を性質の違いを示す品詞の「語」(word) として捉えるべきではない。

また統辞論とは「品詞論を前提にして行われるもの」であるから、品詞によるものではなくて理解した「意味」によつて中國語の「順序」に対して行われる「説明」技巧を中国語の「統語論」と考えるのも不適当である。
それに語と語との間に「関係」を示すものがなにもない中国語に対してもどのように理解したらよいのか？
私は次の三点に分けて中国語を考えてみたい。

1、中国語の「語」においてもっと重要な要素はなんであらうか

2、語順の「順」が持つてゐる文法的な意味は何であろうか？
3、語と順によつてどのように中国語を理解したらよいのか

ただし、本稿はただこれからの中国語研究に方向付けしたいとすることを目的としていることを断つておきたい。

1、語における概念の重要性

一九八七年一二月二七日から三〇日まで台湾の台北で開催された第二回「世界華語文教學検討会」において台湾師範大学の陳秀英が発表した「中文一些特別句式的主賓語位置問題」の中に次のような説明がある。

〔1 a、張三、鶏吃了。〕

b、鶏、張三 吃了。

〔2 a、米、鶏吃了。〕

b、鶏、米吃了。

説漢語の人大多数同意在 1 a、1 b 两句中「張三」是吃的主語、鶏是吃的賓語；而在 2 a、2 b 两句中「鶏」是「吃」的主語、「米」是「吃」的賓語。這種決定是兩個名詞組與動詞間語意的關係，以及我們對現實的理解。」（大会資料一三九一ペー

シ)

確かに陳の言うとおりである。この「語」は明らかに「概念」として捉えられているから上記のような理解に至ったわけである。

上記の表現を品詞を示す語として考えると次のようになる。

	N ₁	N ₂	V
(主語)		(賓語)	
張三	鶏	米	吃
(賓語)		(主語)	
鶏	張三	米	吃
米	鶏	吃了	了

主語にしろ、賓語にしろそれを示すものがなにもないから、もし品詞によって考へると上記のような理解に達することは到底あり得ない。

主語とか賓語とかと語を概念として捉えることによって理解した「全体の意味」に対する説明にすぎない。

語を概念として捉えることによって理解した全体の意味を説明するための技巧を中國語の「統辯論」すなわち中國語の「方法」であると勘違いしている現状である。

次の説明にも同じ現象が見られる。

(客語の提前)

a 我已經写了報告。→ a 報告、我已經写了。

b 我沒去過上海。→ b 上海、我沒去過。

という a a, b b 関係に対し、藤堂明保は「客語を冒頭に出すことができる」という「原則」を作つて説明している。
（『新訂中國語概論』六四ページ・藤堂明保・相原茂・大修館・一九八九年）

もつとも、台灣國立師範大學教授の謝國平はその原則を否定するかのように「老張吃狗肉」に対し「狗肉老張吃」は成立しないと語っている（『語言學概論』一五〇ページ・三民書局・一九九〇年）。しかしこの謝の主張にもなぜ成立しないかといふ理論はないのである。

もし藤堂の説明が正しいとすれば語を品詞にすると、「N₁ VN₂ → N₂ N₁ V」という位置の変換が成立する筈である。そうすると、「鶏米吃了」・「他工作找到了」などを、「米吃了鶏」・「工作找到他了」の「客語を冒頭に出す」文と考えなくてはならない。しかし、「米吃了鶏」・「工作找到他了」という文は意味を成さない。つまり品詞で考へると上記の変換が成立しないわけである。したがって藤堂の理解も語を概念として捉えての結果であると言わねばならない。

一方謝の説明を品詞で考へると、当然「N₁ VN₂ → N₂」
 N₁V」という位置の変換が成立しないことになる。
 しかし謝が自ら自分の考へを否定するかのように「任何人都
 不相信這個人」を「這個人任何人都不相信」として分析するこ
 とができると説明している。（同上・一五八ページ）
 概念をぬきにして考へれば、このような結論が生まれるはず
 がない。

結局、謝も語を品詞を示すものなく、概念として捉えてい
 ることが明白である。

趙元任が「語順」を「主題・解釈」と説明していることに対
 して、大河内康憲は次のように反論する。

「著名な言語学者趙元任が次のように述べる。……つまり主
 語は主題で述部はそれについての説明であるとする。これらに
 ついての反例はいろんな立場で考へられるが、そのひとつは次
 のような文である。

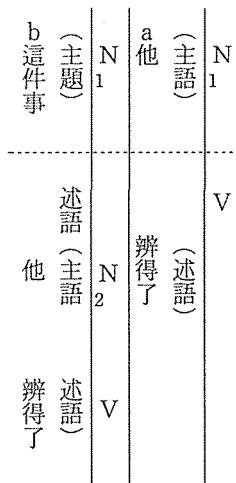
a 他辨得了（かれはやれる。）

b 這件事他辨得了。（このことをかれはやれる。）

aとbのちがいはbの文頭に這件事（このこと）がついたこと
 である。もちろんbは「他辨得了這件事」といえるわけであつ
 て、「這件事」を主題化したものである。しかしその結果「他」
 はもはや「辨得了」の主題（主語ではない。）とはいはず、
 「辨得了」は「這件事」と直接かわりをもつ文となる。「他」
 はむしろ「辨得了」という述語のなかに組み込まれてしまう形

となり、主述述語文（主述ととのったものが述語となる文。）
 とよばれるものとなる。つまりの一部である「他辨得了」は
 けつして「他」についてある説明、陳述がなされたものとはい
 えず、「他」を含めて文全体が「這件事」についてある様態
 を述べているとみられなければならないのである。」（『日本
 語と日本語教育』—文法編—・五六、五七ページ）
 趵元任の「主題・解釈」論（主題・説明）については次の節
 で詳しく述べる。ここではまず大河内の反論を検証してみると
 する。

語順を品詞で示すと、大河内の説明は次のようになる。



aの「他」は主語であり、bの「這件事」は主題である、と
 大河内は説明しているが、語の「概念」をぬきにしてそのよう
 な関係を示すものが中国語に存在していないのは言うまでもな
 いことである。

同じ陳述の対象であるのに、aが主語、bが主題であるとい

う説明は、位置によるものでなく、明らかに語の「概念」によるものである。つまり、趙の言つてゐる主題（主語）は述部（位置）に対する部分（位置）のことであるが、大河内の言つてゐる「主語」とはやはり自分が各語の「概念」によつて理解した全体の意味に対する説明技巧にすぎない。

このような、自分の理解した意味による説明であつては文法研究においては取るに足らないものである。各語の概念によつて全体の意味を理解して、又理解した結果によつて「統辯論」にすりかえようとする傾向がある」とが今までの説明からうかがわれるのであろう。

自分が理解したいくつかの都合のいい例文の意味によつて原則や規則を作るのは従来の中国語研究によく見られる現象の一つである。結局個人の理解した意味や理論無しの原則によるこの類の説明ではとても趙の説に反論できえない。

2、語順の「順」は主題・説明である。

再び大河内に反論された趙元任の主題説を紹介しておく。

「主語跟謂語在中文句子裡的文法意義是主題跟解釈、而不是動作者跟動作、動作者跟動作可以是主題跟解釈的一種情形、好像：「狗咬人。」但在很多語言裡、因為可以用「動作者—動作」說明的句子占的百分比相當高，所以也就成了這些語言的完整句在語義上的特徵了。如果把這種主謂關係叫做「文法上的動作」、

也包括 is... —ed by... 'suffers'... —ing'is a... 一類的謂語，咱們或許可以說主—謂語式的文法意義就是「動作者—動作」、而沒有毛病了。但在中文裡頭，就連上面所說的引伸語式在內、「動作者—動作」能解釈的句子還是非常少，甚至不超過百分之五十。所以採用較廣義的概念：首題跟解釈，反而比較恰當。主語就是名符其實的主題，謂語就是說話人對主題的解釈。因此主語所代表的、不一定是動作動詞(action verb)的当事人……」（『中國話的文法』・四〇ページ・丁邦新訳・中文大学出版社・一九八七年）

まず次の例文から趙の説を考えてみる。

		（主体）
a、	妹妹	吃了。（妹がたべた。）
	（対象）	
b、	糖	吃了。（飴は〔飴を〕たべた。）
c、	魚	吃了。（魚がたべた。あるいは魚は〔魚を〕たべた。）

（以上の例文及び訳は大河内の『日本語と日本語教育』一文法編一からとった・四九ページ・文化庁・昭和六十年）

「論理的に言えば（a）は主体（たべた人）、（b）は対象、（c）はそのいずれにもとれるアンビギュアスな文である。」（同上・四九ページ）と大河内が説明している。しかし、主体

にしろ、対象にしろ、これは語順によつて示されるものではなく、「…まったくSの位置にくる名詞の語彙的意味の差に依存しているだけである」（同上・四九ページ）と大河内自身も認めているように、両者の持つてゐる概念によつて理解しているだけではないか。

このように、理解した内容によつて語順を説明しようとするから、次のような奇妙な説明をせざるを得なくなる。

（中国語の場合）「…主語はときに施事であり、ときに受事であり、ときに施・受事のいずれでもなく、さらに賓語も施事であつたりするから、主語と賓語、施事と受事の間には必然的関係はない」（『中国語学新辞典』・四三ページ）結局、「主語・賓語」と決めて、「施事・受事」と決めても、「その間には必然的関係はない」という事実を認めざるを得ないことになる。必然的な関係がないから、このような「複雜な関係」は双方の概念によつて判断される結果にすぎない。いわば語順によつて示されたのはただ「なにか」に対する「説明」だけであると言つてある。

したがつてこの必然的関係のない「なにか」と「説明」とを「主題・解釈」と説明し、また両者の間には必ずしも主述関係が存在しているとは限らないと主張している趙の見解は非常に合理的なものであると言いたい。

語を概念と理解すべきであるという前述の説明とを合わせて考えると、「主題・説明」とは当然「語」の位置を示すもので

はなく、実は「概念」の位置を示すものである。いわば語順全体において「主題」は説明される「概念」であり、「説明」は説明する役割をもつてゐる概念であると理解すべきである。

「主題・説明」こそ順序によつて示される文法的な意味である。上記の例文で説明すると「吃」は「主題」を説明する役割を持つてゐる概念である。また語順全体において「吃饭」などのように「吃」によつて他の対象と関係付けることもありうるのでこのような説明役である概念を仮に「関係概念」と称し、「K」で表す。

これに対しても説明される「妹妹・糖・魚」などの概念は語順全体において他の概念に対して関係付けることはしないので仮に「非関係概念」と称し、「H」で表す。関係概念として使えり、Hであると見るべきである。

ものの「動作・性質・状態」などを表す概念は当然説明する概念として使い易い。それに対して「ものや思想」などを表す概念は説明する概念として使いにくい。ただし細かい分類は次の研究課題にしたい。

これで概念の位置を示す「主題・説明」という語順を次のように説明することができると思う。

概念によつて示される順序の文法的な意味

（主題）

（説明）

H (非関係概念) —— K (関係概念)

甲、常識及び社会通念による制限

この常識と社会通念とは当然中国人のものを指している。

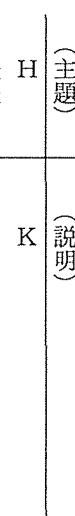
次は関係概念Kを中心にして從来「N V」・「N V N」・「V N」といわれている語順に対してどのように全体の内容を理解すべきかを考えてみたい。

3、潜在的制限

意志伝達を目的とする言語本来の役割から考へると、中国語の場合、概念及びその順序によつて確認されるのはただ主題と説明と二つの部分だけである。両者の関係を示すものはないから、どのように理解したらよいのか。両者の概念をてがかりにして人間の「判断」に頼らざるを得なくなる。これはすなわち従来の研究者たちが「論理関係・総合判断・意味による判断」と言つてきたものであろう。ただし「人間の判断」が必要であるという事実はずつと守られてきた品詞論の否定につながりかねないから曖昧に取り扱われてきたわけだなからうか。

しかし、判断するには当然それを制限するものが必要である。皆自分勝手な判断に任せると、「言語の目的が達成できなくなるおそれがある。そこで私はこのようなく、与えられた情報に現れないものを潜在的制限と称し、常識及び社会通念による制限と言語環境による制限」と二種類に大別しておきたい。

①、H・K語順
「これは一番單純な「主題・説明」構造であると言えよう。
「N V」と言われるものの語順はこの類のであると言える。



妹妹 糖 魚
——
吃了。

語順全体において「妹妹・糖・魚」は説明される概念であるから「主題」であり、「吃」は説明する概念であるから「説明」であると判断する。

「K」は「H」に対する説明であるから、「妹妹」という主題の概念は「行動能力があるが、食べ物ではない」というような常識の働きによつて、Kの「吃」をHの行動を説明するものと判断し、全体を「妹妹が食べた」と言う内容で理解される。「糖」という概念は行動力のない食べ物があるので、先と同じ常識の働きによつて、Kの「吃」は当然主題Kの「糖」の行動でなく、その「性質・状態」を説明するものと判断すべきであろう。「一桶飯吃十個人」という文に対し誰も「吃」を行

動力のない「一桶飯」の行動としてとらえ、語順全体を「一桶の御飯が十人を「食べる」」と理解されることはない。

魚は常識で考えると「行動力があるが、食べ物もある」概念であるから、これだけの情報であるならば、Kの「吃」が「行為者」の「魚」に対する説明であるのか、それとも「食べ物」の「魚」に対する説明であるのか判断できない。だから理解できない結果になる。

香坂順一は「賊拿住」という文の内容を「賊がつかまつた」と理解し、次のように説明している。

「（賊）は人間であるから意志性があるから（拿）という動作をおこなうことができる。しかし、この文の意味としては、もつともふつうには（賊）は（拿）という動作の主体ではなくて、その動作をうけているものである。」（『中国語学の基礎知識』・二八一ページ）このような説明の裏には「賊は人を捕まえる立場にあるものではない」という常識が働いたのである。もし「拿住」が「他動詞」という性質を持つてゐるならば、上記のような常識を当然必要とはしない。

次はKの前にもう一つ「H」を付け加えて、「H₁・H₂・K」語順のときは、どのように理解したらいいかを考えてみよう。

H₁は間違いなく主題であり、Kは説明である。しかしH₂には二つの可能性が生じてくる。つまりH₂はH₁と「主題部分」を構成することもありうるし、また、Kと「説明部分」を構成することも当然可能である。

H₂がそのいずれであるかはKとH₁との概念によって判断されるべきものである。

前記の陳秀英の例文をもう一度取り上げて考えてみよう。

主題 説 明

H ₁ (主題)	H ₂ (主題)	K
1 a、鶏	張三	吃了

1 a、 b、 b、 鶏	張三 鶏 米	吃了 吃了 吃了
-----------------------	--------------	----------------

陳が例1 a・1 bの「張三」は「吃」の主語、「鶏」は「吃」の賓語（目的語）、例2 a・2 bの「鶏」は「吃」の主語、「米」は「吃」の賓語であると判断している。「這種決定是兩個名詞組（鶏・張三、鶏・米）与動詞（吃）間語意的關係、以及我們對現實世界常識的理解」という説明から、「主語」や「賓語」は各概念によつて理解した結果を説明するためのものであり、文法的な意味がないといつてわかる。

さて「概念」及び「順序」によつてどのように判断したらよ

いのかを考えよう。

前述のようすに「K」の前の「H」はすべて主題である。しかし「張三」と「鶏」とは行動能力を持っているが、「吃」という「K」の概念によつて「張三」は動作者として「鶏」は食べ物として常識的に考えられるから、「張三」と「鶏」とが同類の概念すなわち並列の主題としては理解されにくい。

「鶏」「米」についても同じことが言える。同じ食べ物としての共通部分はあるが、「米」と違つて「鶏」は行動能力をも持つてゐる。だから、これだけの情報であるならば、常識によつて「米」は食べ物、「鶏」は動作者であると判断される。つまり主題H₂はH₁とは並列の主題であるかどうか、Kによって判断しなくてはならない。上記のようすに、同類のものでないと判断されると、「主題・説明」という順序の原則に基づき、H₁は主題になるが、H₂とKとが説明部分を構成するという結果になる。

しかしそうなると判断が変わるのであらう。

主題		説明
H ₁ (主題)	H ₂ (主題)	
1、父親	母親	K
3、鶏	鶏	
2、飯	菜	
鴨		
	吃了。	
2 主 題	1 主 題	説 明
H ₁	H ₂ (主題)	K(説明)

「吃」によつて判断すると「父親」「母親」のいずれも行動者であり、食べ物ではないから、Kの「吃」に対して両者は並列の主題であると判断されるのであらう。

飯・菜ともに行動能力のない食べ物であるから、「吃」に対して両者は同類の主題であると容易に判断できる。同時に「吃」は食べ物としての「飯・菜」に対する説明になる。

しかし、「鶏」「鴨」になるとの語順によつて表されている内容を理解することが不可能になる。なぜかといふと食べ物でも、行動者でもある両者の間では常識で考えると「吃」という関係が存在しにくいから、並列の主題であるところまで判断できるが、「吃」はいったい行動者としての「鶏・鴨」に対する説明であるか、それとも「食べ物」としての「鶏・鴨」に対する説明であるか、これだけの情報では判断できないからである。

Kの「吃」によつて判断された結果として「父親・母親」、「飯・菜」、「鶏・鴨」は並列の主題になり、語順において主題部分を構成することとなる。

これをまとめて見ると「H₁・H₂・K」語順には判断によつて次のように示すことができるわけである。

H_1 (主題) H_2 (主題) — K —
次はもう一つの H を K の後に入れる「 $H_1 \cdot K \cdot H^a$ 」語順を考えてみることにしよう。

③ $H_1 \cdot K \cdot H^a$ 語順

従来「 $N \vee N$ 」とされるものをもこの類の語順であると考えていよい。

この場合は当然 K の前の H_1 が主題である。 K とその後の H^a とが主題に対する説明部分を構成する。

主題の H_1 は関係概念の K を通じて他の概念 H^a と関係を持つことがありうるから、場合によってどのような概念と関係をしているかを限定しなくてはならない。

従来の研究では、この関係を表す K を「自動詞や他動詞」などと決め付けるから「目的語」であるかどうかのような論争から脱出できなかつたわけである。

しかしそのようないくつかの概念でも H^a になれるとは限らない。この語順の H^a も逆に二つの制限を受けなくてはならない。 H^a は関係概念 K と関係するような概念でなくてはならないのがその一である。さらに主題の H_1 と関係を持つものでなくてはならないのがその二である。

では、このタイプの概念及び順序を次のように示したい。

主題	
H_1	

説	
K	

明	
H^a	

まず関係語 K を動作を示す従来の「自動詞・他動詞」などのような考え方を除去しなくてはならないと同時に「 KH^a 」は主題「 H_1 」に対する説明であることを忘れてはならない。だから説明の部分をどのように理解すべきか当然主題 H_1 の概念に左右されるわけである。

「他吃飯」を例にしてみると、 K の「吃」によつて主題の「他」（行為能力者）と「飯」（食べ物）との関係が判断され、それで「吃飯」が「他」の「行為」であると最終的に判断されるわけである。

「他吃館子」の場合、同じ K である「吃」によつて判断すると、「他」は行為能力を持つているが「館子」は明らかに「食べ物」ではなく、またただの場所でもなく、常識で考えると「吃」を提供するところである。したがつて「他」という主題に対しても「吃館子」という説明を「レストランで食べる」という意味で理解されたわけではなかろうか。

もし「他吃〈山上〉」という表現は使わないとするならば、場所を意味する「山上」が人の常識として「吃」との繋がりがあると判断しにくいかどうか。

このように考えると、次のような表現も判断しやすくなるのではないかうか。

「他吹笛子」は K の「吹」によつて判断すると「他」は行為能力のある存在、「笛子」は吹奏楽器である。したがつて主題の「他」に対して「吹笛子」は「笛を吹く」という意味で理解解

されるのであろう。

しかし「他吹電風扇」になると、Kの「吹」によって考へる「他」は行為能力があるが、「電風扇」は「吹くもの」ではなく、またただの道具でもなく、常識的に言へば、それが「吹」を提供するものである。したがつて上記の「吹館子」と同じ判断で「他」に対する「吹電風扇」という説明を「扇風機にあたる」という意味として理解されるであろう。

「他晒太陽」・「他泊火」のような表現も同じような判断で理解できるのであろう。「十個人吃兩磅肉」と「兩磅肉吃十個人」とは意味において同じであると説明されている。(『中国話的文法』・四ページ・趙元任著・丁邦新訳・中文大学出版社・一九八七年)

意味の論議より、両者の文法的な違いを明らかにすることが大事である。

両者は明らかに主題が違つてゐる。一つは「十個人」、もう

一つは「兩磅肉」に対する説明である。つまりKの「吃」によつて主題の「十個人」と「兩磅肉」及び主題の「兩磅肉」と「十個人」との関係を判断しなくてはならないわけである。したがつて主題の「十個人」に対して「吃兩磅肉」という説明を「兩磅肉を食べる」と判断されるのであろう。これに対して主題の「兩磅肉」(物でなく、量を示す)に対する「吃十個人」といふ説明は「十人の食べる量」を示すものと理解されるのである。

大河内康憲は「吃大碗」という表現の「大碗」を道具として説明している。(『日本語と日本語教育』—文法編—五一ページ)

これは「人間が茶わんを食べるはずがない」という常識から「大碗」を道具と判断したのではなかろうかと思う。だから大河内は「大きな碗で食べる」と訳している。しかし、その訳は間違つてゐる。なぜかというと、「こ」でいうこの「大碗」は道具ではなく、「量」を示すものであるからである。すなわち「大盛りにする」という意味である。大河内の説明はいわば中國人の常識や社会通念に対する認識が不十分であるところから生じた誤解であると言つべきであろう。

④ K・H_a 語順

従来の「VN」とされるものもこの類に属してゐるものと考へてよい。

上記の H₁ K H_a 語順と比較して考へると、K H_a 語順は明らかに「主題」のない「説明」である。すなわち「主題」の有無が両者の文法的な違いであるということである。この K H₁ は主題の明示が必要でない場合使用される語順であると言えよう。

すでに述べたように、H_a は K と関係する概念を限定するとともに K の概念によって限定されるのである。こういう場合は、非常に習慣的色彩を帶びているのが否定できない事実であ

る。

「下雨・下雪」などはよく意味のない「自然現象」という説明がなされ、だから「雨・雪」を「下」の後に置くと片付けられているが、「雨」を主題にして、「下了三天」という説明を付けて「雨下了三天」という自然現象表現が成立する。

これは「下」が「雨」に対する説明でなく、「下雨」全体が一つの説明を構成し、「雨が降る」ことを説明するものだからである。別に自然現象だからというわけではない。

「開花」と「花開」との文法的な違いを説明すると「開花」全体が一つの説明になり、「花が開く」ことを説明するものに對して「花開」は「開」が「主題」の「花」に対する説明である。

だから「客人来了」は「客が来ている」ことを説明するものであり、「客人」に対する説明ではない。

「發生了一件事」も「事件が発生した」ことを説明するものであり、「一件事」に対する説明ではないと見るべきである。しかし、すでに述べたように、 H_a として使える概念はKの概念によって制限されているのである。Kの概念に対してどのような概念が H_a として使えるかについてKの概念に対する中国人の捉え方もあるし、また慣用的な部分もあるうが、これは中国語の「意味論」か「語源論」の問題になるのであろう。

語順によつて表される内容を常に常識及び社会通念に基づき判断しなくてはならないことは言語風土や民族文化の背景を中心

国語の研究に取り入れるべきことを示していると言えよう。

乙、言語環境による制限

高名凱は中国語と西洋語とを比較して次のように説明している。

「西洋的語言是要許多抽象的觀念來說明。……中國語則不然。中國語往往是把一切的事素具体的排布出來，讓人看出其中的關係。」（『漢語語法論』・六七ページ）

つまり中国語を理解するには今まで述べてきたように、人間の「判断」が不可欠なものであることを示している。しかし常識及び社会通念による判断はあくまでも与えられた情報に限つてのものにすぎない。表現自体をもとの言語環境に戻さないかぎり判断すらできないものもある。

もとの言語環境とは当然その言語を取り巻く談話状況、文脈などを指すものであると考えられる。言語環境が常に言語と一緒に存在していることを忘れてはならない。

「魚吃了」の「魚」は「動作者」なのかそれとも「食べ物」なのか判断できないのは言語環境から切り離されたためであると思う。

たとえば「魚吃了」が「魚餌辻?」（餌は?）という質問に對する答えであるとすれば、「魚餌」が答えに明示されなくてもこれは明らかに「主題」の「魚餌」に対する説明であり、

へ（魚餌）魚吃了」であると考えるべきである。したがつて主題は「魚餌」であると、い制限を受けて「魚」が動作者であることが容易に判断できる。

「鶏鳴吃了補身体」の場合、「補身体」（へ人間の）身体にいい）によつて「鶏鳴」は食べ物であると判断されるであろう。また、「毒虫」は常識では「毒のある虫」であると判断されるかもしれないが、農業に関する記事のタイトルである「毒虫、也毒人」の「毒虫」は「也毒人」によつて「虫を毒殺する」と理解されるのであろう。

大河内が「他辨得了」と「這件事他辨得了」とは違う表現であると説明しているようであるが、元の言語環境に戻すと両者は同じ主題（這件事）に対する説明であることが当然考えられる。

いかにして言語環境から手がかりをよみとるかということは中國語を理解する際、非常に大事な部分はあるが、無視されてしまったことであろう。

上記のように、中國語を理解するには概念とその順序以外、さらにこのような「常識や社会通念や言語環境」のような潜在制限による判断を欠かしてはならない。

潜在制限についてもつと細かく分類できるかもしれないが、中國語研究に方向付けしようとする本稿の趣旨ではないので、論じないことにする。

五、おわりに

中國語は概念語である。だから「語順」は「語」（word）でなく、「概念」の順序であるととらえるべきである。「概念」をぬきにして中國語の文法が語れない。

中國語の場合、西洋語に見られる「性質」（品詞）の違いがないから、概念及びその順序によって、また常識・社会通念や言語環境などを手がかりにして判断をしなくてはならない。

常識や社会通念にしろ、言語環境にしろ、これは、中國語を取り巻く現実の世界である。

つまり現実の世界を無視すれば概念及びその順序によって伝達されようと/orする情報を正確に理解することが不可能になるということである。いわば中國語を現実の世界から切り離してはならないということである。

しかし、西洋語の場合、概念よりも性質の違い（品詞）が大事である。この性質によつて言葉を形式化することができる。結果としてヘ統語論の原理として文法範疇と概念範疇との混同あるいは混合をいましめ、文法範疇は言語形式に表されたものにその基準をもとめなくてはならない//といふことが可能になる。「概念語」と言われる中國語に対して西洋語を「性質語」と見ることができるであろう。

両者の性格は全く違つてゐるのに、中國語は從来西洋語と同

じ文法範疇を有すると扱わってきた。結果としてすでに述べたように中国語の文法研究における「品詞論・統語論」とは実際には「論理関係・総合判断・意味」という正体不明な方法によって理解された意味を説明するための技巧となつてゐる。結局、中国語を理解するための文法的な原則（規則）はいまだも欠如している結果を招いた。

「性質語」の文法が「性質」によって考えられていることに対する、概念語の文法は「概念」によって考えるべきである。これは私がこの論文を通して示したい今後の中国語研究方向で

ある。もつとも本稿の試みは中国語の文法論へのスタートにすぎない。この方向に沿つてもつと研究しなくてはならないのは当然である。西洋語の文法体系へのこだわりは他言語の真相を見失う結果を招くだけである。中国語そのものを研究対象にし、自分の頭で考えない限り、いくら研究しても眞の中国語の文法が生まれてくるはずがない。「西洋語の規則がすべての言語の原理である」という結論先行の研究姿勢は葬り去るべきものであろう。